国際化教育推進を目的とした英語による講義法についての米国 FD 研修報告

生命先端工学専攻 生物工学コース
原 島　　俊

研修場所： カルフォルニア州立大学フルトン校（California State University, Fullerton）

研修期間： 2010年3月8日（日）～3月21日（日）

はじめに

３月８日の夕刻、まだまだ肌寒い成田を出発して約 11 時間の飛行、同日の午前 10 時にロスアンジェルス国際空港に到着した。そこは、もうカリフォルニアの陽光である。何十年も前、2 年程アメリカ東部のメリーランド州に住んでいたことがあるが、冬は-20℃にも気温が下がり、長女が通っていた小学校が寒さのためにしばしば休講になることもあったことを思うと、同じアメリカでも別世界である。数学者の藤原正彦が、数学の理論は、毎日、どんよりとした雲に覆われたうっとうしい日々が続くイギリスのような国でよく発展し、決して、ハワイなどの南国では発展していないと言っていたことを、ふと思い出したりしていていた。いよいよ研修が始まるという高揚感とともに多少の不安感もあったが、カリフォルニアの陽光と空港まで迎えにきてくれた今回の研修プログラムを運営している California State University, Fullerton 校、University Extended Education 部門のスタッフ、 Mr Ken Zhao の陽気なしゃべりに、そうした不安感はいつの間にか消えて行った。こうして始まった２週間の研修を今、思い出してみると、予想をはるかに超えて良い研修をさせて頂いたというのが総括である。研修プログラムの詳しい内容や Fullerton 校のことなどについては、これまで研修に参加をされた先生方のかなりの数の報告書があるので、ここでは繰り返さない。個人的に感じたことに焦点を絞って報告としたい。

１）研修内容概要

この FD 研修は基本的に、i）授業で使う言語としての英語や英語表現（特にスピーキング；Speaking for Communication）についての講義、ii）授業の構成の仕方や進め方についての講義（Faculty Development Workshop）、iii）比較的少人数の授業、および大教室での大人数の授業の参観（Class Observation）、iv）学生に考えさせる授業とはどのようなものか（Critical Thinking）や、授業そのものについての論理的な考察などを含む講義、そして、最後に、これらの集大成としての、iv)研修生自身による模擬講義（Lecture Presentation）の実践からなる。そのいくつかについて、感想やコメントをしてみたい。

２）Speaking for Communication in English

私にとっては、今回の研修で最も学んでみたいものであった。我々教員は、それぞれの専門

分野で使われる英語（単語）についてはよく知っているので、例えば、国際会議での発表については、どなたもあまり苦労することなくしておられると思う。英語での授業についても、だいたいそのようなことであると思うが、それが、国際会議の合間のコーヒーブレークなどで、（もちろん専門的なことが会話の中心ではあるが）学生さんの話や大学のことなど、一般的な内容も含めて会話を進行させていくような状況となると、（少なくとも私の場合）いわゆる fluency が極端に低下していると感じることがある。授業でも、おそらく同じようなことが言えると思う。専門的なことをしゃべっている間は、あまり問題は感じないが、やはり質疑応答など学生との interaction を通じて授業を進行させていくということになると大いに問題があると感じることが多い。そうした状況のとき、native なアメリカ人の先生は、どのような英語の表現を使うのか、どのような英語の言い回しで学生に応答するのかということを学びたいと思っていたが、今回の研修を受けて、そうしたことが非常に勉強になった。この問題は、ある意味、授業の進め方ではなく、英語の問題、あるいは英会話の問題と言われればそれまでであるが、やはり、英語での授業をうまく構成し、うまく進めて行くために訓練が必要な重要なポイントであると私は思っている。ESP（English for Special Purpose）ということが良く言われる。そして、英語が専門の先生方は、ESP は中味が専門的なので、とても教えられないということを良く言われるが、私はそうは思わない。要は、英語の専門用語の問題ではなく、それを使って、どのように英語を操るかという問題であり、これは、我々ではなく、やはり英語が専門の先生方に教えて頂くことが非常に有益であると感じた。

講義内容については、おおむね必要で役に立つものであると思ったが、なかには、そうでもないのではと思ったものもあった。例えば、日本人がよく苦労する r と l の発音などの講義もあったが、きちんと発音することは重要であり、できることにこしたことはないが、そうした発音がきちんとできたとしても、それだけでは、講義をスムースに進めることには繋がらない。やはり、上にも書いたように、言葉と言葉を紡いで英語的な会話とすることが重要であり、こうしたことが訓練できるような授業をもっと多く取り入れて頂くのも、研修内容についての今後のひとつの方向ではないだろうか（しかし、この発音の問題については、以前の報告書を読ませて頂くと、違ったご意見もあり、もちろん私的な感想に過ぎない）。

３）Faculty Development Workshop

これについては、おそらく、いずれの先生方も、どのようにすれば講義が良くなるか、講義はどのように組み立てるべきかは、頭ではわかっておられるように想像する。例えば、Introduction、Main subject、Conclusion の時間配分、ひとりひとりの学生の目を見て（eye contact）講義を進める、また、ある程度（あるいは時には大袈裟に）、教室を動き回るなど、教員の講義に対する熱心度が学生に伝わるような body language なども積極的に取り入れる等々、私自身もいつも心がけていることではあるが、実際には、それがうまく実行できていないと感じることの方が多い。性格の問題、あるいは授業の準備不足などの問題で、これはいくら研修を受けても改善されない自分自身に帰せられる問題と思うこともある。しかし、今回の研修で、やはり、そうしたことの理論的側面や授業の理想の形についての講義を受けて、再認

識をしたり、自己流になってしまっていることに気がついたり、あるいは、なるほどと思うことも多かった。

４）Lecture presentation

私のメンターとなってくれた Maria Linder 教授は、Department of Chemistry and Biochemistry の学科長の任にある生化学が専門のシニアな世代の女性であった。参観をさせてもらった授業は、彼女が１月から５月の終わりにかけて、３０回担当している生化学がメジャーの大学院生対象の 「Metabolism and Catalysis」 と題する授業科目であった。受講生が８名という少人数のクラスで、風貌から判断する限り、(アメリカという国がこのようなものかもしれないが)たった８人なのに南米系、欧米系、アジア系、ヒスパニック系とアメリカ国籍なのか留学生なのかわからないくらい多様であった。

Linder 先生の授業は、原著論文の図や表をプロジェクターにPDFとして映して考えさせるというものであり、教科書は用いていなかった。受講生が８名なので、さすがに全員の学生の名前を覚えており、学生の目をよく見て、会話型の授業を心がけているという印象を持った。私は、この８名の大学院生を相手に授業をすることになっていたが、どれくらいの長さの授業をすればよいかと伺うと、全部の時間を使ってやって欲しいということであったので、結局、75分の授業時間のうちの70分を使って講義を行った。生化学がメジャーの大学院生であり、私の専門の遺伝学はあまりやっていないということであったので、生命現象の解析に遺伝学をどのように使うかという教科書的な講義を50分程行い、その後、残りの時間で、それを実際の研究対象にどのように応用するかについて、我々の研究も引用しながら講義を行った。Linder 教授を見習って、学生の目をよく見、講義室を歩き周り（今回の研修の成果？を取り入れて、阪大での私自身の講義の時には考えられない程の大袈裟な身振り手振りで)、時には質問をするという、アメリカ人になったような気持ちで講義を行った。Linder 教授からは、その夜のメールで、以下のような感想を頂いた。もちろん、お世辞も多分に含まれているとは思うが、自己採点としても、まあまあだったと勝手に思っている。

Dear Dr. Harashima

I just wanted to take the time to tell you that I think your presentation was very good. There were many things about it that I particularly enjoyed. I think you illustrated the methods and ideas/concepts very nicely, with figures showing cells and Pi coming in, etc. and with a chain of proteins that interact, etc. You organized the whole thing very well, and made some difficult concepts understandable. The colors also helped, and I think the pace was good – not too fast, not too slow.

Thank you again for making the effort to present something that might be valuable to my students. The inositol phosphates will be an important part of their later work, and you have now introduced them to it at one level.
See you tomorrow! Maria

５） Class observation

授業参観について、研修プログラムでは、Linder 先生の授業を３回参観させて頂くことになっていた。しかし、１回は参観をさせて頂いたものの、もう１回は定期試験ということで参観は無し、また、後の一回は、私自身が講義をしたので、結局授業参観は１回だけであった。研修参加者のそれぞれについて、だいたい３回の授業参観が予定されていたが、上記のようなこともあるので、やはり、もう少し回数多く（たとえば５回くらい)、授業を見学する機会があれば良かったと思う。また、当初，私が講義をする日程は、他の先生方と同様、研修の最終日の前日に設定されていたが、当地に着いてから直ぐ、研修２週目の火曜日にしてもらえないだろうかという問合わせが Linder 先生からあった。理由は、その日に予定されていた定期の中間試験を、受講学生にできるだけ試験勉強を長くさせたいということで、木曜日に移したいということであった。その時には不都合はないと思い、そのようにしてもらってもかまいませんという返事をしたが、後で２週目の火曜日、水曜日、木曜日に、結構、プレゼン講義に役立ちそうな講義が４回も設定されていることに気がついた。しかし、既に、試験日の変更が学生にアナウンスされてしまっており、もとのスケジュール通りに戻してもらうことをお願いできなかった。また、講義資料の英語表現なども十分見てもらう時間がなく、結局、模擬講義は、これまで自分がやってきた自己流の講義になってしまったように感じている。授業参観としては、メンターの先生の授業参観以外に、全員で、大教室での授業を参観する機会が一コマあったが、私の場合、結局、授業参観は、これを入れても２回だけであった。私の場合の特殊事情は別としても、プログラムにもっと多く授業を参観する機会が取り入れられても良いのではと強く思った 。

６）思わぬ出来事

研修中、Linder 先生が企画していたセミナーがあるので、できれば出席して欲しいというお知らせがあった。セミナーの宣伝ちらしも十分見ず、ちょうど、授業の空き時間でもあったので出席することにした。セミナー会場に行ってみると、驚いたことに、セミナーの講師が、昔米国の NIH に留学をしていた時、近くの研究室のポスドクであった友人（現在 Duke 大学教授の Prof Dennis Thiele）であることがわかり、思わぬところで再会を果たすことができた。セミナーの中で、何度も私の名前を出してくれて恐縮したが、外国での忘れられないセミナーとなった。

おわりに

こうした役に立つ、良い研修に多くの阪大の先生方に参加をして頂くためには、阪大のキャ

ンパスでこのようなFD研修を実施すれば良いのではとも思ったが（少なくとも、我々が受けた講義の一部は可能であろう）、おそらく外国に来て、ある意味、日本とは隔離された状態で、この研修に専念できるということによって可能になっている面もあるのではと考え直した。阪大でやれば、確かに多くの先生が参加できるとは思われるが、途中、ややもすれば会議で抜けることを余儀なくされたり、他の用事も入ってきたりして、なかなか思うように研修に専念できない状態になる可能性もあろう。また、実際にアメリカの大学で行われている授業を参観するということも、このプログラムの重要なコンテンツのひとつと思うが、それは、やはり現地でないと体験できないものである。やはり、海外研修ということが必須の要件のような気もする。そのお陰で、久しぶりに学生（随分年取った学生であるが）の気分に帰ることもでき、本当に有り難い時間ではあった。もっとも、（研修と直接関係の無いことで恐縮であるが）夕方ホテルに帰ってメールを見ようものなら、すぐに返事をしないといけないものもあり、それに返信をすると、日本では朝が始まったところなので、皆様，元気にメールの返事を返してこられる。それに返信をすると、またすぐさま元気よく返事が返ってくる。これをいくつかのメールについてやっていると、知らぬ間に時間が経って、そのうちにだんだんと夜も更け、もう昼も夜もなくなってくるという状態に陥りかけた。昼、夜、逆の外国に出張するといつも思うことではあるが、遠く離れて研修に専念できるという気持ちが半分、そうでもないという気持ちも半分、という複雑な気持ちである。

最終日の前日の夕刻、フェアウエルパーティを開催してくれた。研修修了証書の授与式の後、今回の研修参加者の中の一番年寄りの研修生として、お礼を申し上げることになった。Fullerton校、University Extended Education部長のHarry Norman博士をはじめとして、自然科学部学部長のRobert Koch先生、講義の構成法などの講義をして下さったBruce Rubin先生、英語教育法について教えて頂いたCindy Bertea先生、Critical Thinkingの講義をして下さったKathryn Bartle Angus先生、スケジュール全般についてお世話頂いたMelem Sharpeさん、日本人として細かいお世話をして下さったスタッフのYuki Uedaさん、資料準備などをして頂いたRene De Leonさん、メンターのLinder先生、その他の先生方、スタッフの皆さんの全ての方々のお名前を挙げ、一言ずつ感謝の言葉を添えてお礼を申し上げた。今回研修に参加した６名全員の感謝を十分伝えることができたものと思っている。

謝　辞

最後に本FD研修の機会を与えて頂いた大学院GPの取り組み責任者の金谷茂則教授、渡航の手続き等を始め、スケジュール全般について細かいところまでお世話をして下さった松本玲子さんには格別の御礼を申し上げたい。また、今回の研修を一緒にさせて頂いた伊東 忍先生、金子嘉信先生、渡邉 肇先生、山田裕介先生、松永幸大先生にも本当に御世話になった。お名前を挙げて恐縮であるが、特に伊東先生の愉快なパーソナリティによって随分楽しい気持ちにさせて頂いた（ひょっとして、ご本人は、その逆であったかもしれないが）。おそらく、この研修がなければ、同じ研究室の金子先生は別として、先生方と親しくお話をさせて頂くことはなかったであろう。そういう意味では、今回の研修は、私にとっては、こうした意義も大変大きかったものと思っている。皆様に感謝！！